



昭和47年(1972年) 10月号(No.328) 社団法人 日本山岳会 (J.A.C.)

目次

自然保護を訴える(特集)

大雪縦貫道路に反対……井手貞夫… 1

上高地ロープウェイ……村井米子… 1

連峰スカイライン……木名瀬巨… 2

本 文

山と蝶のものがたり⑥……春田俊郎… 3

山頂仏(下)……藤島 玄… 5

高所登山技術<3>……村井 葵… 6

図書紹介

自然保護の父  
ジョン・ミュア……島田 巽… 8

未踏の山河……今村正二… 8

『秘境・奥美濃  
の山旅』読後……高木泰夫… 9

会員通信

泥湯より  
高松岳と山伏岳……小林智明… 4

武田先生を憶う……島中善弥… 5

梶山新湯の野天風呂……坂倉登喜子… 6

二世続々……吉沢一郎… 7

その他

ハーディ夫妻  
を福岡に迎える……新貝 敷… 3

'72年ヒマラヤ・ブレ ……吉沢一郎… 7

会務報告

岩永信雄氏寄贈図書(洋書)…… 9

図書室便り…… 10

9月理事評議員会…… 10

会員異動、ルーム、日誌…… 11

復活・新入会員 47・8 …… 11

住所・住居表示変更…… 11

上高地山岳研究所ニュース…… 11

お知らせ…… 11

大雪縦貫道路に反対

井手 貞夫

帯広に近い新得の奥のトムラウシ温泉から、トムラウシ岳とオプタシケ岳との間の通称鹿越峠付近を越えて十勝岳山麓の白金温泉を結び更に北上して天仁峠に至るいわゆる大雪縦貫道路計画については、従来種々積極的な自然保護の発言をしてきた北海道の団体も、残念ながらその特別委員会の反対にもかかわらずはなはだ心もとない。山を愛し、自然を愛する人間で、この道路に賛成するものはまず一人もいない筈なのに、はっきり意思表示がまともでないのは、やはり地元の利害と政治がからんでいるからである。しかし地元の利害と政治といっても、山奥の行きどまりの二つの温泉を結びたいという観光業者と土木関係業者の利害とだけで、果してそれが観光上にそれほど大きなプラスになるかどうかははなはだ疑問であるばかりか、産業上とか何とかいう理由は全く根拠をもっていないのである。いうまでもなく、この地域は大雪山の中でも、最も奥深く、最も原始的な、しかも風光においても

高山植物や森林の美しさにおいても、最もすぐれたいわば奥座敷である。そしてこの原始的な美しい貴重な自然が今日なお護られてるのは、どこから入っても、二日間の暮営を必要とするその不便さの故である。それがここに自動車道が通れば、たとえ一畑余りのトンネルで抜けても、ちょうど桂離宮を一般に開放したと同じような結果になることは目に見えている。しかも環境庁の調査がいよいよ数日のうちに始まって、八月末には結論が出ようとしている。日本のいやしくも山を愛するという者は、いまやはっきり反対に立ち上るべきときである。緊急に日本山岳会や日本山岳協会の道路開設反対運動を期待するばかりで対策が全くないというわけではない。これは全く私の個人的見解であるが、考え得る唯一の妥協案は、鹿越峠付近を通らずにもっと南へ下って、オプタシケ岳の真下を通る道路である。トンネルの長さには四畑以上にもなる。しかし排気

ガスの問題さえ解決すれば、これなら却って冬期も含めて年中道路を通すことも可能である。そして現在トムラウシ温泉までは車で行けるけれども、この車道は、これ以上トムラウシ岳に近づかないですむ。ただこれは全く山岳人としての個人の意見で、この道路をもつては個人のおかつ動植物生態学上に難点があるかどうかは私にはわからない。道路がない方がよいにきまつてはいるが、その影響の程度についてはその方面の学者の意見を聞かねばならない。

本稿は、自然保護委員会の企画により、早々と執筆いただきましたが(八月四日受領)、特集の都合上掲載ができませんでした。

＊

本会は、環境庁に対し左記の通り計画中止を強く訴えましたが、井手氏をはじめ関係者の努力にもかかわらず、本計画は進められています。(編者)

拝啓 時下益々御清米の御事と御悦び申し上げます。

さて本会は大雪縦貫道路について別紙の様な要望書を作製致しました処、八月二十五日の環境庁長官の決裁は、

全く私共の要望に沿ったものでありませんでした。ところが最近になって北海道開発庁の強硬な申入れによってその線が一層後退することになったと伺いました。私共はこれ以上自然の破壊の進行を座視するに忍びません。ここに改めて要望書を提出し、併せて不運転の決意をもって残り少ない我国の自然環境の保全のため格段の御努力を要望致す次第であります。

昭和四十七年九月六日  
日本山岳会自然保護委員会  
担当理事 板倉 勝正

環境庁長官 小山長規殿  
要 望 書  
拝啓 残暑の候益々御清米の御事と御悦び申し上げます。

さて今回の大雪縦貫道路計画につき一言申入れたいと存じます。

計画によりますと、天候温帯・トムラウシ温泉間に自動車道路を貫通することになっておりますが、これが実現されれば、現在の日本に僅かに残された秘境トムラウシ一帯の自然環境は破壊され、かつ動植物相に極度の打撃

幸い上高地山岳研究所の建築もきまっています。今後一層親愛感をもつ人々が増えるであろう。しかも、上高地溪から穂高一帯は、日本における近代登山の先駆を成した山岳地域であり、開発過度の現時点のわが国の中でもまあまあ自然が保護されてきた所といえよう。

上高地ロープウェイ問題  
村井米子

上高地は、初めて入山してから満十二年の私ばかりでなく、当時山上生活をしておられた横さん松方さん三田さん……さては戦後の若人まで、多くのJAC会員の山のふるさとではあるまいか。

昭和四十七年八月二十日  
日本山岳会会長 三田幸夫

を与え、さらに道路建設に伴う諸工事のため浸触を促進して山崩れをおこすなど、取返しのつかない事態を招くことになり兼ねません。

こうした場合、行政当局者、業者、施工者などは、自然を破壊しない様留意する、工事後の復元に努力するなどと繰返し言明して参りましたが、元来自動車道路を通して自然が破壊されるいなどということは有り得ないことではありません。その惨状は、スバル・ライン、石榎山を見ましても明らかでありましょう。一度破壊された自然は、到底人為をもって回復することは出来ません。

本会としましては、この計画の中止を強く要請致します。なお万一、己むを得ない場合には、北海道自然保護協会その他と御協議の上、事前に周到な調査を行ない、比較的破壊の少ない代案を御考慮下さる様要望致す次第であります。

とまれ、観光大資本の毒牙は、何としてこの宝山を見逃そう。ひそかに種々の計画をたて、昭和三十年代末期には、長野、岐阜両県側からの開発案が競って出された。長野県側は、鳥ヶ谷の北方、鍋冠山より大滝山、徳本峠北側を経て上高地に入るスカイライン道路案。岐阜県側は、飛騨側の蒲田谷をつめ、鍋平から西穂高の山稜に達し、上高地溪へのロープウェイを架さんと熱心に動きはじめた。

昭和三十八年夏は、奥穂の今田重太郎さんの小舎が四十年になるのを祝って、松方三郎さんと訪ね、濁沢一興穂一ジャンダルム一犬狗岩一岳沢と攀じながら、四十年の昔とは異なり、岩がらくになったのに驚いた。その夏は十日間入山、また晩秋も、徳本峠、蝶大滝と登ったが、レーンジャー沢田栄介さん達の努力で、上高地の美化運動が実現しているのを楽しんだ。コヤシ平とまで悪名を得た小梨平をはじめ、山の上、川の中まで、ゴミや空罐類がよく片づけられはじめた。「美しくなった上高地溪」と題し、自然保護誌第三十一号に、私は報告したほどである。

しかるに車道とロープウェイ問題は次第に計画をすまず、無視されぬ状況になった。十月五日、上高地で開催の本会支部長会議では、本部から渡辺副会長はじめ役員と、東京、東海、富山静岡、信濃の各支部長および関係者多数があつたり、ゲストとして上高地のレーンジャー沢田氏も迎え、議事の中で特に、本会の自然保護に対する態度を検討し、支部長会議の名において反対を決議した。かつ、会内に自然保護に関する委員会を設け、反対運動を強く推し進めることを申合われた。東海支部において作成された反対意見書を基に、改めて日本山岳会としての要望書を作成、関係各官庁をはじめ広く一般に呼びかけることになった。

要望書(会報二〇三〇号参照)は、十一月六日開催の日本自然保護協会理事會に、とりあえず村井より提出した。厚生省国立公園部長には、急を要するため村井が口頭で伝達した。すでに文部省文化財保護委員会でも、同問題反対が決議された。

松方三郎会長の帰朝を待ち、三十九年一月二十三日、日本山岳会の自然保護委員会との打合せが行なわれ、各方面へ働きかける準備をすすめた。

昭和三十九年七月二十二、二十三日には、第六回国立公園大会が、平湯温泉で開かれた。その帰途に日本自然保護協会および国立公園審議会委員等も上高地に入りこの問題の実地検討を行なったので、日高信六郎さんと村井も同行した。

西穂高ロープウェイ計画の奥飛騨観光会社側から、現地観とくわしい説明が行なわれた。奥飛騨観光というのは、名古屋鉄道の子会社で、岐阜県側も加わり北アルプス観光への足がかりを得ようというのである。

いったい最初の案では、ウェストン碑のすぐ傍にケーブルを下るそうとしてあった。そんな上高地のまん中に、とんでもない私が大反対し協会も同意したので、次の案は玄文沢へずらしてきた。玄文沢も、大正池からはすぐ見えるから困る……と思いつつ帝國ホテル二階ロビーに一同であつてみる。

と目の前、ま正面が予定地であつた。「これは駄目だ」いくらか作る方へ傾いておられた田村剛博士も、こう叫んで反対された。かくて、次の案が出るまでの日時が浮いた。

車道の長野県案も、徳本峠下まで視察に行った一同の目の前に、ひどいガレと砂防工事のトラックまで埋っている地質の実状が、露呈されていた。この脆い地勢に車道は無理があるし、上高地溪に車道を通すことは、やはり好ましくない。車道は河童橋までとしてより奥は歩くに楽し道とすべきだ。反対の大体の決議がまとまった。

もともと、同じ反対意見であつた日本山岳会は、同協会と手を結んで、各官庁方面への運動および一般への自然保護思想に働きかけることとなつた。

元来、上高地は中部山岳国立公園の中心地であり文部省の文化財保護法でも、特別天然記念物と全域を指定している。厚生省と文部省の許可なしには些細な人工も加えられぬよう、法律で守られている筈である。しかし、厚生省の国立公園地域の中で、法律上もとも強く禁止し得る「特別保護地域」の指定がまだ行なわれていなかった。

かくて厚生省国立公園部(当時)に、指定を早めるよう要望した。当局も同意見で手配中だったので、この指定も速やかに下つた。

ロープウェイは、数度の計画変更の後、飛騨側の鍋平から千石根までのみ許可され、一昨年夏から開通した。西穂高線から上高地への乗り入れは法律上厳禁として禁止されたわけである。長野県側の車道も不許可になった。反対運動は、一応成功したといえよう。

以上、大まかながら上高地をまもるための自然保護運動の一つの実績を述べた。しかし、二つの法律にまもられてはいるとはいえず、観光資本側は折あらばと、絶えず機会を狙っている。現にこのごろまで、ロープウェイ延長の噂が耳に入ってくるのだから、決して油断は許されない。上高地としては、マイカー族の難も出ていて、乗り入れを制限する案も種々研究中であるが、なかなか名案の得られぬことも周知の通りである。山岳地帯の自然保護の原点として、上高地をまもるにはどうしたらいいか、会員みんなの自分たちの問題としてぜひ絶えず心にとめていただきたいものである。

### 山梨県

### 連峰スカイライン

木名瀬 巨

自然保護の問題として日本各地にのけるいわゆる「スカイライン」計画なるものに反省の聲が急激にたかまってきたことは国土を愛する日本人の心のあらわれであつて、むしろおそきに失した位であつて、大変よろこばしいことといわなければなりません。最近伝えられている山梨県における連峰スカイラインの計画は、河口湖からはじまって笹子峠・大菩薩連峰・柳沢峠から奥秩父連峰の山梨県側を貫通して、金山高原から八ヶ岳へ抜けるえんえん百五十kmにもおよぶ大規模なもので、日本における最も大きな自然破壊として警告すべく筆を取った次第です。

この計画は今に始まったわけではなく、現山梨県知事が就任されてから打出されたいわゆるグリーンプラン・過疎対策の一環としてすでにあったもので、それが今年のはじめ、知事と大石前環境庁長官との話し合いがニュースで伝えられてから、多くの人の関心事となつて社会問題・政治問題としてクローズアップしてきたわけです。そうしてこの事件の本質が正確に伝えられな

いままに、わが国でも最も伝統的な自然美を伝えている地帯が破壊されることを憂へる真実を訴えたいと思います。まずこの計画が山梨県で立てているものと環境庁で理解しているものと大きな食い違いがあることを指摘しなければなりません。環境庁の理解は標高千m以上の尾根は通さない、国立公園内は通さないというものです。驚くべきことに県では平均標高千五百mの高度に設置する計画を立てており、柳沢

峠を通過し、大菩薩連峰と奥秩父主脈の太古から伝えた日本の代表的な国立公園の景観と平穏な動植物環境の大量破壊になることは必至といわざるを得ません。すでに富士スバルラインにおける植物の枯死、北沢峠におけるスパー林道の工事で生じた大量土砂により日本有数の蝶の宝庫といわれた地帯が完膚なきまでも破壊されこれは同じ山梨県で起きた生々しい出来事であり立山スカイラインによって雷鳥の数の著しい減少など、自然開発の名のもとに計画されたドラブウェイこそ自然破壊の元凶であることが実証されています。美濃で知られた四国の河川峡谷が石榎スカイラインにより見る影もなく埋まり、昔日の面影を全くとどめなくなり、有料道路の収入も前年よりへる有様で何のためにスカイラインを作つたのかと非難が集中し、愛媛県当局は作るときは県民が賛成してくれたのにと頭をかかえる有様で、まさに地元が良いことがあると宣伝して作ったスカイラインが自殺行為になつたとしか思えません。

さて奥秩父連峰スカイライン計画の特徴としてあげられるのが、非常に政治的であるということです。すなわち山梨県の収入として有料道路の売上上げを県の社会施設の建設に充てるというキャンペーンにより県の知事選が左右されるといふことですが、どう考えてもおかしなことは、七百億にのぼるといふ膨大な建設資金を市中銀行から借り、毎年数十億の利息を払う無理をする位なら、なぜ優先的にその金で社会施設を作らないのか。一年分の利息だけでもかなりの福祉施設ができるではないか。収入源としてもあてにならない出血となることは石榎スカイラインの教える所です。さらに山梨県では過疎対策としてスカイラインが必要だといいますが、過疎の問題はもともと日

本の工業化により多くの勤労者が都市に集中したから起きたことであって、スカイラインとは全く無関係なことで...

『山岳』一年一号に小島久太が「本会の成立」という山岳会創立の経緯をKKの名で書いているが、その中で...

明治三十九年の春、発刊をみた『山岳』一年一号に、高野鷹蔵が「高山の蝶に就きて」という題で三種類の蝶の旅行をあげたり日本博物学同志会の採集...

けるぶどう畑やワインを作る産業などの発展を考えた方がはるかに良いでしょう。それにもかわらず、県当局が...

の教師の指導によって、その影響を受け、動植物に魅力を持ち、研究に情熱を持った当時の府立一中の生徒を中心に...

として学業を続けながらも、博物学同志会の面倒をよく見て『博物の友』にもよく寄稿していたし、例会にも出席...

山と蝶のものがたり

母屋をとった山岳会

春田俊郎

もういべき美しい山河の大破壊をもたらすことに深い悲しみを抱くとともに多くの政治的な要因が含まれている...

明治三十九年の十一月六日、三十八歳の若さでこの世を去ってしまった。帰山を失ったことよって博物学同志会...

力であった三宅恒方は地方の農事試験場に赴任してしまし、やはり既に大物の研究に没頭して後輩の指導ができた...

5

手おくれで、山岳会や自然保護協会などにおかれても、常に機先を制してスカイライン阻止に取組んでいた...

このような状態で博物学同志会の中にあって働いていたのは、山岳会とかけ持ちの河田、高野、梅沢や、市河...

これは比較して山岳会はまさに旭日昇天の勢であった。『山岳』の一年一号の発行は予定より若干後れたものの、...

左右するのは奥秩父の美しい自然に対する愛情と情熱以外にはないと痛感しました。地球における石油資源もあと三十年と推定されているとき、やたらにスカイラインを作っているガソリンを浪費して...

福岡に迎える 新貝 勲

私達福岡登高会がニュージブランドアパスに行ったのが一九六六年、あれからも六年過ぎたことになる。山口節子さんから手紙があり、ハーディ氏の来日を知らせてくれた。楽しかった六日前のマウント・クック登頂がふと私の胸をよぎった。その後、佐藤テルさん、神原氏からも連絡をいただき...

五月二十九日、末松福岡支部長原口氏、私、ほか会員二名で別府へおもむく。午後九時半くれないに見学することにした。

丸が静かに別府港に着き多数の外人客が下船したがそれらしい人がいない。更に目をこらしている。一番最後にジパン姿の軽装で夫妻がおりてこられた。立山ですっかり日焼けされた夫妻に挨拶、紹介をすませ、別府市内の米屋旅館へ向かった。この旅館は古色蒼然とした別府の最も古く格式のある宿である。とにかく翌朝が早いので荷物をおいて買物に出た。別府名物といえは何とんでもなく竹細工で、果物籠等を末松氏より贈られて大変喜ばれた。ニューランドには竹がないので、よい土産ができたようだった。旅館と一緒に食事をすませ、ハーディ氏はさすがに遠征なれしているだけに何でも召し上がる。またご夫妻とも箸を上手に使いこなしていらっしやった。「瀬戸内海はきれいだが、公害の影響が起きているようだった」と痛い話。

五月三十日午前七時四十分、車で出発。別府では地獄めぐりする予定だったがあいにくの雨風で、仕方なく坊主地獄のみ見物する。地底よりほえるような音で吹き出す蒸気を眺めておられた。ここから見るとすばらしい周防灘を見せられず残念。やまなみハイウェイを通して観音岳ロープウェイへ向かう。ロープウェイは風雨で運転を中止していたが、管理所に事情を話し技術課長より説明をきく。熱心に質問されるハーディ氏に、丁寧にひとつひとつ現場に案内して説明して下さった課長さんにお礼をのべて、九重、阿蘇へ向かった頃少しづつ雨もあがってきた。ハーディ氏曰く「私が来たので山がはずかしくなっているんじゃないかな？」やがて九重の牧の戸峠着。阿蘇山群は寝仏の姿、阿蘇を正面に眺めながら車は九重高原の放牧の牛の群をつきつて、阿蘇山ロープウェイへと走る。奇異な姿の鷲ヶ峰ロックガーデンでは、ハーディ氏も山男らしく、火山岩でも

ろくはないか、ルートは何本か等々の質問があった。同行の原口氏が日本で初めてここでナイロンザイルを使ったと話すと、原口氏の現在の巨体(90キロ)から想像できない様子だった。百人乗りの阿蘇山ロープウェイでは所長自ら図面を持ってこられて説明していただいた。特に安全性についてハーディ氏はくわしくかなりつづこんだ質問をされていた。営利主義の日本の観光業者とは違う。具体的なこともきかれる。例えば乗車賃とか、床がどの程度汚損されるか、またその掃除の方法、ゴンドラが故障して止った時の救出方法、年間純利益高、何月が一番客が多いか等々。ハーディ氏は質問に対する答を刻明にメモされていた。

この頃になると空は真青に晴れ渡り山鳥の声と一面のミヤマキリシマの美しさに夫人は大喜びで、さかんにシャッターをきっていた。先を急ぐので火口見物をやめ、その代りに徳富蘇峰が阿蘇を眺める絶好の場所とした大観峰でゆっくりと阿蘇を觀賞。中岳の白煙が快く遠来の客を迎えてくれた。昼食は末松氏の案内で阿蘇国際カントリークラブとする。雄大な阿蘇をバックに全くすばらしいゴルフコースである。シングル2の末松氏と、しばしばゴルフ談義に花が咲く。食後、バルコニー下の日本庭園が大変気に入られたハーディ氏は、こんな庭をニューゼーランドにも作りたいと、夫人を入れて何枚か写真をとっておられた。帰路は松原ダム、夜明ダムを見学。日田市では九州でも古い焼物として知られる恩田焼を贈る。ご夫妻は焼物がお好きなので大変喜ばれた。それから一路福岡市へ向かう。途中拙宅の新築したばかりの会合の晩にハーディ氏に書いていただいた会の看板を正面入口に打ちつけた。我々の良き思い出として永遠に残るであ

ろ。十七時五十分、市内西鉄グランドホテル着。福岡の山男約五十名がハーディ夫妻をかこみ歓迎会を持った。クックに登られた久留米大の脇坂教授はじめ、ハーディ氏と同じく南極に行かれた九大教養学部長緒方教授も出席されハーディ氏の南極とニューゼーランドのスライドを見て話はずきない。また、昭和二十五年、カンチエンジュンガ遠征を目前にしながら中止せざるを得なかった福岡山の会の方は、当時の計画書を持ってこれら旧談にわくわくしても話がつきず、九時すぎにやっ散会した。

翌三十一日八時二十五分、博多発つばめ二号で出発。岡山、大阪、名古屋での乗り継ぎを詳しく説明する。駅頭には末松氏はじめ高尾福留連副会長ご夫妻等十人が見送った。わずかに二泊三日の短い時間であったが、生きているものはこうしてまた会えた。一九六六年にニューゼーランドへ行ったメンバーの内、岡部(東京)柳原(福岡)はずでにない。生きていることをしみじみとみしめる。「お疲れさまでしたハーディご夫妻、また元気で会いましょう!!」今回のハーディ夫妻来福に当ってご多忙中ご同行下さった末松支部長、通訳をかって出られた原口氏(特にロープウェイなど)と専門用語の多い話題で助かりました。はじめ、大勢の方々で大変お世話になりました。また、米屋旅館は大分合同新聞の梅木氏が、福岡西鉄グランドホテルは西鉄山岳会員の方達がお世話下さいました。紙上をお借りして、改めてお礼を述べさせていただきます。

訂正 会報「山」第三二七号ははじめのヒマラヤ文中、標高四八〇〇mは三八〇〇mに、六七〇〇m級は六、七〇〇m級に訂正いたします。(筆舌)

### 泥湯より

### 高松岳と山伏岳

小林 智明

高松岳は海拔一三四九m、隣の山伏岳は一三一五mで、この二つは雄物川の支流高松川の源をなしている。東方には皆瀬川をへだてて栗駒山が屹立し南には虎毛山、さらに南西には役内川をへだてて神室山塊が対峙している。

北方へは即ち高松川が流下し、須川にて雄物川に入るまで、その流域には十余の集落をかぞえ、それらと東隣は皆瀬村との間にはいくつかの越えてみたい峠路があり、そしてそのあたりに柳倉沼、田螺沼、苔沼、五才沼、板戸沼などの美しい湖沼が点在する。また泥湯、川原毛などにはあちこちに熱泉が噴出して、東の小安や、西隣の秋ノ宮と共にこの地方は天与の温泉に恵まれ、四季の変化にも富む東北で、屈指の風光明媚な山地なのである。



山伏岳より高松岳を望む

歩いて板戸にたち帰った四日間の紀行であり、当時の高松荘の人々の生活や川原毛鉾山の盛況や、泥湯の有様などを知らることができ興味深い紀行文である。真澄はその半月ほど前には栗駒山に登ったということである。こんなに荒れては高松岳はだめかなと思いつながら、泥湯の小椋旅館に泊ったのは五月二日。その夕刻から雨は雪に変わり10cmほどに降り積った。明日は逗留になるかと、あきらめの気持とほっとした気持とが重なって、湯上がりの一酌に陶然となつて寝ついた。

温泉の上手に左から小沢が一本入ってくる。そこに湯沢山岳会のためた高松岳への標識があり、それに従って左手のブナ林に登り始めると昨夜の雪で径が白くなっている。まもなくその新雪の下に残雪を踏むようになり、そんな間にもシウウジウバカマの花が咲いていた。径は高松川を右足下に見ながらのゆるい登りである。風はややゆるみ、碧い空にブナの新芽がとき色にふくらんで、小枝が風に

そよいでいる。落葉松や杉の植林もあり、間の抜けたような鬼の畏がぶら下がっていた。タムシバの白い大きな花のあたりから、鶯の澄んだ声が胸の中心まで洗うように響いてくる。

一時間ほどで新湯に着いた。湯気が蒙々と立ち上がって流れる小沢は熱い湯である。ひと休みして夏ミカンを食べる。足下にヤマブキシヨウウマ、トリアシシヨウウマ、ゴゴミなどが出ていたので晩の菜にと採る。好物のコシアブラの芽はまだ小さくて堅い。

径はやがて小さな支尾根を登るようになり、谷をへだてて真白な山伏岳が樹林の間に望まれる。イワウチハの花が夜来の雪をかぶって寒そうにふるえている。やや高度が上がるといよいよ高松川のつき上げに三つの頭を並べたような高松岳の頂稜が眼前にせまってきた。あたりの残雪も次第に多くなりこまで来ると空はすっかり晴れ上がり陽光がまぶしく、暖かくなってきた。マンサクの黄花も見え、ブナ帯はいつしか岳樺の領域に変わっていった。

小安岳の下を捲いて主稜に出ると曾遊の虎毛山が大きな姿を現わし、軍沢岳や神室山が屏風のように連り、その向こうに月山が丸い大きな姿を覗かせていた。高松岳はもう声とどきそうに近く、右にやや低く立った山伏岳の背後には、白い端正なピラミッドが春の空に大きく浮かんでいる。鳥海だ。東の空には栗駒が悠然たる山容を見せさらに北方の焼石岳へと眼を誘う。眺望を楽しみながら今朝作ってもらったおにぎりを食べる。樺もたせの漬物も美味し。秋田美人の宿のお内儀さんの顔を思い出す。『高松日記』の「さもたせ」は沢もたせ(樺もたせ)が転訛したものであろうなども考えてみた。宿の人達もこれを「さもたせ」と発音していた。

高松岳の頂稜にはカタクリの花が咲き、北の峰頂に昨年建てたという小屋があり、湯ノ又温泉から登ってきた四人の人達に会った。南峰には、高松岳頂上の標識や祠が賑やかに立ち並んでいたが、どちらの頂にも三角点は無かった。西南を見下すと秋ノ宮が見える。黒い影が一つ、風に浮かんでしばらく高の真似をしていたが、やがて啼声で鴉とわかった。午後一時、高松岳を後にして山伏岳へと雪の山稜をたどる。田原沼がエメラルドのように見え、春風駘蕩、天上の散歩となる。鳥海を眺め、神室山塊を眺め、虎毛や栗駒を幾度となく振り返っては、この東北の辺境の山の五月の好日に来合わせた幸運をしみじみと思うのであった。そして次はどこへ登ろうか、早くもそんなことを考えながら、いつまでもねころんで風の音を聴いた山伏岳の頂を辞し、残雪の音を聞かせる降って、永い春の日もようやく暮れかかる頃、泥湯のなつかしい湯の香を嗅いで一日の山を了った。泥湯の感懐は、拙い七絶一首となつた。

- 高松岳下春の帰るを送る
  - 猶見山中白雪飛
  - 此夕温泉孤客浴
  - 天涯只聽一溪微
- 高松岳下春の帰るを見る  
猶山中白雪の飛を見る  
此の夕温泉孤客浴し  
天涯ただ聴く一溪微かなるを
- (四七・六・三〇)
- 山岳図書交換即売会(第五回)は十月二十一日(土)午後二時から本会ホールで開かれます。

### 山頂仏(下)

藤島 玄

それを信じる前に、どうして、どんな神仏がいるのか、と本気になって観察したものだ。山に対する彼等の生活と、そう遠くない距離にわれわれもいる筈だと感じてくるからであった。彼等が信仰の対象として尊崇する山頂の神仏の銅像が、落雷の頻度日本一の統計のある日光連山ですら、落雷による被害が見られぬのを、本気になって不思議に思った。低い所から、一歩一歩登った視線が、くの字に曲った膝頭をとらえ、下に人が倒れていた例は嫌いだ、どんな石仏かと思ひながら、ぬうつと出る気分はまたとない。こうした自分の心を分析してみたりする。有史以前から鳥海山の火山活動があった。当時から先住民族はいたであろう。有史以後は越後、信濃、上野あたりを中心にした大和民族の北進もあった。それらの民族は一方では協力し合い、一方では対抗しながら、開拓に従事したに違いない。それは焼き畑農業をやっていた山地民族と、水田稲作をやっていた平野民族の生存競争とも云われようが、両者とも田畑の農耕民族だから、求めるものは水であり、水の源である雨であった。それを天に向けてた願望の凝結が、鳥海山である。これは何もこの山に限らない。四面海に囲まれた日本列島の通例である。

そして、古い民族間に固有の精神文化を方向づけたのは、原始的信仰の対象としての山であり、そこに祀る神であった。それが後から拡がった高度宗教の仏教であり、修験道である仏である。その両者の流れが、現在も複雑に絡み合っており、反拗もなければ矛盾もなく、普遍的に両立している。

新山すなわち享和岳(二二三七・四m)は、享和元年(一八〇一)の噴火の塊状熔岩である。間宮林蔵が樺太を探検し、本居宣長が没した年で、ようやく一七〇年を経たにすぎない。爆裂にも飛ばずに残った外輪山の七高山連峰の山名を記すと荒神岳、行者岳、伏拝岳、文珠岳、御峰など修験道系となつていく。最高峰の七高山の由緒は二説の伝えがある。一つは比叡、比良、伊吹、愛宕、葛城、金峰、大峰の七高山の尊体を勧請した。一つは毘婆屍(ビバシ)、屍棄(シキ)、毘舍浮(ビシャブ)、拘留孫(クルソン)、俱那含牟尼(クナゴンムニ)、迦葉(カシヨウ)、釈迦牟尼(シヤカムニ)の過去七仏を尊崇して祭るとある。

### 武田先生を憶う

島中 善彌

六月七日武田先生は高令九十歳で逝去された。天狗とまで渾名された先生がこう早く世を去られたには夢にも思つていなかっただろう。世間並といえ九十年の天寿を全うしたと長生きを囁かれそうである。ところが先生の九十歳は違ふ。五年前八十五歳の夏、白馬岳と月山に登頂し、その余力を馳せて鳥海山へ来られたのである。軽いとはいへカメラその他の入ったサブザックを背負い、私共と一緒に八合目まで登って、当日は七合目御浜小屋まで引返して一泊、翌日は頂上までと強気なところを見せておられたが、時に台風襲来の予報があり、御浜から下山し途中拙宅に一泊なされた。二度目のお泊りである。先生の食事は至って簡素なもので、拙宅ではあれこれと食膳を賑わしたが多く手をつけず前回同様自家製の味噌漬がすっかりお気に召したと見えしきりに美味しい美味いと賞味されていた。いつもながら私のロックガーデン(七十余坪)を喜ばれ、時々ご自邸の庭から高山植物の数々を小包で何度かお送りいただいた。より多くの植物を植え、よりよいロックガーデンにして多くの人から見て貰うなら、とお心遣いであった。私は植物については素人なので何や彼やとご指導ご教示に与つたが、本田先生と同じく、いつも親切に教えて下さつた。何年かの間に先生からの通信が数十通に達している。鳥海山の東面、鳥海村の山奥にマタギで知られている百宅部落がある。その地に数百年を経たという巨大な柳の木がある。柳の周囲は墓地で、今も

なお土葬であることから柳の木の栄養は万点というところ、青々と茂っている。俗に柳墓という。先生が文部省に話したらしく、検分といつたかたちで自宅を訪れた。柳はエゾヤナギといつて周囲五m七〇、枝張り直徑三二m、これは先生自身測られたものである。よれば日本一の柳とのことである。一昨年四月、山と溪谷社の創立四十年記念祝賀会に、私も招かれて出席したが、知人の顔も多く嬉しかった。足立画伯や黒田ト夫妻それに今は亡き深田先生もおられ傍らにおられた藤島敏男氏をご紹介して下さいました。その片隅の椅子に武田先生がおられたので、

### 高所登山技術考(3)

村井 葵

#### 原始の生命力

私が演じた不可解な起死回生劇の原因を追求するために、私はもう一度、自分の生体を高所に晒してみたいと思うようになっていた。「高所登山失格者」のレッテルを貼られ、うちしおれない淋しさを感じていたからである。そのまま天命を待つことにしたまま日本山岳会のエベレスト登山が終了した年の三月、私はアフリカのサバンナの原野を車で走っていた、キリマンジャロを登るために……。

赤く焼けただれた熱帯の大地をマサイ族が歩いている。いまだに原始の生活を固持するマサイの黒い姿には、人影がなかった。よく観察すると、彼等の脳天に太陽があり人影は一点になって足元におちているのだった。私はアフリカの自然の中に、二百万年もかかって焦がされた大地と人を見た。放牧

また鳥海へとお誘いしたら、気はあるが今原稿四百枚頼まれて動けないとこぼすように云われたが、思いなしか元気がないようだった。思えばあの時が先生の見納めだったのである。

### 梶山新湯の野天風呂

坂倉登喜子

「雨飾山に雲がかかると雨だとか」大糸線根知駅から道づれになった土地の人が、あのあたりが雨飾山だと教えてくれた。その頃、雨飾山の前山に薄

い雲がかかってしまつた。明日は雨かな。山口行のバスを待つ間にこれから梶山新湯へ行くのだと話す。昔なつかしの「旧盆には新湯の前庭で盆踊りをやったものでしたがね」とまた話しかけたひげのおじさまは湯治客の多かった頃の昔話をしてくれた。今年の五月から明文堂の森さんが引継いで五代目の経営者になら



梶山新湯野天風呂

れたことを聞きこみ、はるばる糸魚川にこの山の湯、梶山新湯という名に心ひかれて、秘境探訪の私たちが、人は、新宿を早朝発つて、その夕方七時頃、漸く山の湯に辿り着くことができた。森さんと久しぶりの対面になつたかみあつた後、「さあ早く汗を流

しては……といわれて飛びこんだ野天風呂の、何とすばらしい心良きだったこと、根知川上流五百m先から引湯した熱いお湯が豊かにあふれる湯船(ドラム罐)の前の湯槽は青苔のついた昔からの大きな野天風呂で、半かこの半分は星空が仰げる。夏なら適温の透明なお湯でランブの灯にすぎとおる肌の白さが浮き上がるように見えた。翌日は、地元の人の子想通り雨の一日、湯治気分、小鳥の声を聞きながら静かに休養することができました。秋の紅葉ときのこの狩りを楽しみに再訪を約して帰る日は、爽やかに晴れた空にカッコーの音が湧える朝でした。

の民マサイは焼けた大地を帽子も被らず、裸足で歩いていた。文明人が車から外に出てマサイと同じ条件でキヤパンしたら、一時間もたたないうちに日射病になり発狂してしまうだろう。アフリカの原野には雑草のように逞しい、目の覚めるような生命力があったのだ。人類が本来持っていた、野性の強さを見せつけられる思いだった。

野蠻な原始社会にはなかった。また、現在でも低開墾国や開発途上国には、無償の努力を強いられるような登山行為はみられない。それは生活それ自体が自然と密着して、ことさらに自然を憧れて山登りをする必要もなかったのだらうし、仮に登山を企てても、登山に必要な費用の捻出は不可能なことなのである。精神文明の一つの発露ともいえるスポーツ登山が芽ばえたのはいうまでもなくイギリスであった。

#### 野蠻な雑草精神を鍛えたい

イギリスといえば、古典的な、初期のころのエベレスト登山が思い出される。まだ人が触れなかった、科学や生理学に敢然と立ち向かい、科や生理學では説明できない極地登山の何たるかを身をもって示したことは、少なくとも訓練途上の私たちを理屈なしに勇気づけ、行動や考えを示唆してくれたものがあった。

アルビン・クラブ創立五十周年の一九〇七年に、既にエベレスト登山が提唱されたことは興味深いことからである。一九二一年、北側からマロリーたちが、酸素補給器なしで、八二二五

mに達していることは驚異的な事実なのである。マロリーとアーヴィンの失綜で有名な一九二四年には、力尽きたザイル・シャフトのソマーヴェルを残して、ノートンが単独で八五七二mの高度に達している。これも酸素補給器なしの登高記録である。ノートンは、「元気に充ちたパーティなら、酸素なしでエベレストの頂上に達しよう」と断言している。このイギリスの敢闘精神は、いまだ年老いたシフトンの頭の中に生きていて、酸素レスのエベレスト登山を提唱しつづけているのである。

「二二年のマロリー、二四年のノートンが八千m以上の世界をひたむきに登山しつづけたときは、もちろんナイロン装備はなかったし、写真でみるように他の装備や器具にもお粗末極まりないものであった。しかももっとも必要な精神は一流だったのである。満ち足りた物質文明の中に浸っていると人間は知らないうちに虚弱になっていく傾向がある。いたれりつせりの用具の多様化により創造力や応用能力も培われなくなる。そして山登りにもっとも必要な自己防衛本能や生命力も退化しはじめていのではないかと思えてならない。高所に憧れる者、心すべきである。装備や器具が一流になっても、主役を演ずる精神や身体が二流、三流に退化してしまったのでは何にもならないのである。」

このノートンやシフトンの言葉はヒロイックに受けとめて「誰にでもそれができる」と早合点することは間違いない。しかし彼らは、人類が全く未知であった高所に、勇敢にも自らの生体をもってそれを確認したという尊い経験がある。五十年前の先人のパイオニア・ワークをふまえて、日本からもそういう強い登山隊がエベレストの頂上をかつく日が来ることを思いのぞんでいる人が——もちろん私も含めて——いかに多いことか。

しかしながら、英国には紳士の精神とは全くうらはらな、ある意味の「野蠻」な精神があったことを忘れてはならない。つまり人間が生得の力と知恵とでどこまでも道を切り拓いていこうというたくましく雑草精神である。これはかつての英国の繁栄を築いてきた精神でもある。

(つづく)

# 1972。 ヒマラヤ。 プレモンズーン

## ナンパ (六七五四m)

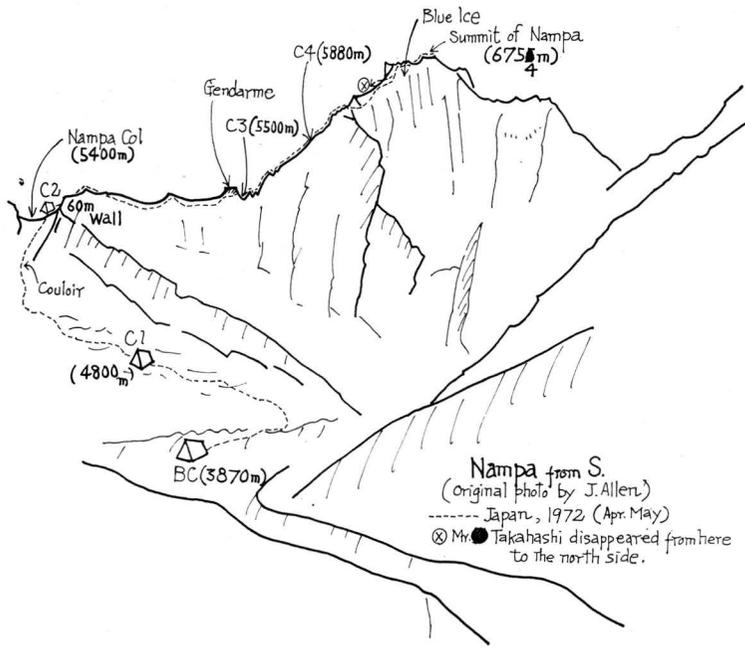
### — 登頂、事故 —

#### 青森県山岳連盟登山隊

(The Japanese Mt. Nampa Expedition, 1972)

隊員 松島静吾 (隊長, 36)、小宮山 鐸朗 (副隊長, 31)、木村福寿 (28) 沢田之 (24)、高橋進 (23)  
以下、通信現地による

前略、もう既にお聞きおよびのこと  
と思いますが、私共の登頂の様と  
クシデントの状況について報告申し上



げます。  
その後、四月二四日にナンパ西稜の  
ジャンダルムを越えた所、五五〇〇m  
にC2を建設、四月二九日には西稜の  
懸垂氷河上五八八〇mにC4 (アタック  
・キャンプ) を建設いたしました。  
ルートはC2の壁になり、これを登る  
青氷の六〇mの壁になり、これを登る  
と南面からの写真に見える雪稜に出ま  
す。この雪稜は北面がスッパリ切れ落  
ちていますので、南面をトラバース気  
味に登ります。  
ジャンダルム近くになりますと、  
「よく倒れないな」と思うほど瘦せた  
岩稜になり、まるで屏風の上を歩くよ  
うに登り、ジャンダルムはそのままナ  
イフ・リッジを登って、ピーク直下南  
面の垂壁をトラバース、ピークを乗り  
越えてC3に達します。  
C3は英国隊(一九七〇年)と同じ  
場所と思われま。非常に狭いリッジ  
上で、ハーケンで固定してやっとテン  
トを設営、キジ打ちもフィックス・ロ  
ープで確保してるといった所です。  
C3から上は今まで以上に瘦せた岩  
稜が続き、三つのピークを越え、やっ  
と西稜上部にとりつく事になります。  
ここからは氷と岩のスキリした、  
平均傾度四七度の急斜面が頂上直下の  
『笠岩』まで続きます。出っ歯のアイ  
ゼンとアイスメスが気持ちよく効く、  
素晴らしいルートです。  
この西稜上部も同じようにナイフ・  
リッジですが、中ほどの北面にひっか  
かった懸垂氷河があり、この上五八八  
〇mにC4を建設し、これをアタック  
・キャンプとしました。  
C4から上も同じように岩と氷の急  
斜面が続き、笠岩の下からは南面のヒ  
マラヤ壁をトラバース気味に登り、再  
び稜線に戻ります。  
この笠岩の上、六三〇〇m付近が英  
国隊のC5地点と思われる。雪と氷

のナイフ・リッジはそのまま広くなっ  
て氷河に変わり、更に青氷の一六〇mの  
壁になって頂稜に出、頂上へと続いて  
おります。  
ルートは全体としてスキリしてい  
て、特にC3からは期待通りに素晴  
らしく、われわれを喜ばせてくれまし  
た。  
次に登頂とクシデントの様につ  
いてご報告いたします。五月四日の朝  
C4 (アタック・キャンプ) から二名  
(木村、高橋) のアタック隊員を送り  
出しました。その日、予定では頂上に  
立つてから降り、青氷の下の水河で  
ビバークし、五月五日下山の予定でし  
た。  
しかし実際にはその日のうちに頂上  
に立せずにビバーク、翌五月五日午前  
一時五三分登頂、午後一時に下山開  
始となりました。トランシーバーは故  
障しておりました。  
私はアタック・キャンプでサポート  
隊を送り出したあと、彼らの現われる  
のを待ち構えておりましたが、やがて  
頂稜から青氷へ二名の隊員が現われ  
ます。一人が懸垂下降、やればら間  
を置いてもう一人も下降を開始しまし  
た。  
私はカメラをセットし、再び見上げ  
た時、あとの一人が逆さに青氷を転落  
滑る音と悲鳴がアタック・キャンプま  
で聞え、大きな衝突音と共に私の視界  
から去りました。  
その後、サポート隊 (沢田隊員とサ  
ーダー・ソナイシ) と私と三名で木村  
隊員をC4へ収容、暗い夜を迎えまし  
た。高橋隊員は青氷の下から北壁側  
(N2氷河) へ約二〇〇〇m転落した  
模様で、全く絶望でした。  
事故の直接の原因は、懸垂下降の失  
敗と思われるが、これからじっくり  
検討したいと思っております。  
これからシリガルドウティンダンガ

り経由で帰りますが、できればシリガ  
ルドウティンから飛行機をチャーター早  
くカトマンズに戻り、事後処理に当り  
たいと思っております。  
帰国後は地形その他につきいろいろ  
ご教示頂きたいと思ます。七〇年英国  
隊のジョン・アレン氏からの手紙は、  
ベース・キャンプで受取りました。と  
りあえず以上ご報告申し上げます。  
一九七二年五月二三日  
帰路キャラバン、マルマラス  
コットにて、隊長 松島静吾  
(吉沢宛)

### ◆二世続々◆

\* 近頃私の周辺で二世がゾクゾクと生  
れている。雁部貞夫君もその一人。と  
ころがつけた名前が「櫻園」。この間  
パーティのことで交渉に行った品川駅  
前のホテルにある中華レストランの名  
前が同じだったが、中ア研究病膏盲の  
彼のこと、料理屋の名前から採用に  
なったのでないことは先刻承知。だが  
孫子の代まで中央アジアの研究をさせ  
ようとする魂胆はあつぱれ。

\* 会津若松の住人宮森常雄君のは結婚  
十三年目の結実。予定日より一カ月も  
遅かったので大き過ぎとうとう帝王の  
御厄介になってしまった。それにして  
も女性でよかったと私は思う。この方  
はまだ名なしのお嬢ちゃんだが、井上  
靖や雁部君じゃないのだから、敦煌な  
んてのはつけない方がよい。「生まれ  
ましたよ」という長距離電話がかかっ  
て来たので、びっくりしたが、指に地  
図作りのタコがなかったのは幸いであ  
った。  
(吉沢一郎)

図書紹介



中垣 淑子 画

自然保護の父

ジョン・ミュア

東 良 三 著

自然保護を口にするのは易し。しかし、自然破壊を身をもって阻止するのは、なま易しいことではない。

その困難な仕事に生涯をかけて、しかも大なる保護を達成した人として私たちにジョン・ミュアの名は敬意をもって記憶されている。そのミュアの全業績を一般に知らせる本が、今までわが国にはあまりなかった。小島(鳥水)さんの『氷河と万年雪の山』には随処にミュアを讃える文章が見出されるが、これは伝記ではない。一般向けの記述でもない。

その点、この東さんのミュア伝は、「自然保護の父」の生涯を知るには、またとない著書であって、著者の労を多としたい。小島さんは右の著書のなかで「シエラの哲人、ミュアの死んだ翌年(一九一五年)私はアメリカに渡航した。当時私は、ミュアの名

未踏の山河

エリック・シプトン 著

大賀 二郎 訳  
倉知 敬 訳

すら知らなかった。生前相識る機会のなかったことを悔いた」と記している。東さんの方は、若いころからアメリカで生活していられたので、一九一四年五月にミュアをマルチネズの邸に訪れている。ミュア翁は七十六歳、東さんは二十三歳その数ヵ月後にミュアはこの世を去った。

そんなわけで東さんは、おそらく今日ミュアを知る唯一の日本人といえるので、彼の伝記を執筆するには最適任者にちがいない。それに東さん自身、小島さんの滞米時代、米西部の氷河や山をともに歩いた精力的な登山家であり、ミュアが歩きまわったアラスカにも詳しい。(東さんが、かつて本会の会員であったことを記憶している人たちは多いと思う。)また在米生活が長いうえ、土地カンもあり、ミュア文献にも広く目を通して、たしかに、千家哲磨氏が推薦しているように、詳細なミュア伝を書くにふさわしい著者である。自然保護の必要が強く叫ばれている今日、ミュア的情熱を知ってくれる人たちが、この本によって増えてくれれば著者も本望であるうし、私たちにとつても嬉しいことである。

最後に、読後に強く感じたことは、実に詳しくミュアの足跡がたどられていながら、どこかアクセントに欠けるという点である。評伝ではなく伝記なのだといわれればそれまでだが、もう少し立体的な彫像を見せる工夫はなかつたかな、と思われはる。巻末の詳細な資料には、著者の労を多としたいが、もう一つ欲をいえば、ミュアの活躍のあとを示してくれる地図があれば、読者にとって便利だったろう、ということである。

昭和四十七年五月、山と溪谷社刊 A5判二六九頁 定価一四〇〇円 (島田 眞)

有名人の自叙伝は大抵、学校の成績抜群、試験はすべて合格、優秀な友人に恵まれ、順風満帆で世に出てゆくことになっていくようである。ところがこの自叙伝は少し違って、友人にこそ恵まれているが、学校の成績と入学試験は調子が悪く、このにが経験は一生活きまわっている。おそらくシプトンはやれば出来る才能を持っているが、興味のないことは無意識のうちに努力しなくなる性質ではないかと思われる。

中学の頃となると、探検精神の芽はえが生まれてくる。珍しい鳥の巣を探しに崖を攀じ、木登りをし、また古城の抜け穴を探検したりしている。やがて欧州アルプスでの登山はウィンパーにあこがれてドフイネから始まる。いかにも少年らしくほえましまる。一九二八年ケニアに赴任する、ケニアへ行ったのも山があるからであった。この地でウィン・ハリスやティルマンと友人となる。ことにティルマンとは二十年間中央アジア、ヒマラヤ、カラコラムの山々を一緒に登るパートナーとなつていく。ケニアの登山が認められ、三一年カメットに、つづいて三年のエベレストに招待されている。二十五歳の時である。

シプトンは、三年のエベレスト隊は世帯が過ぎて行動が遅くなるとし、ライト・エクスペディションの長所を力説している。そして、エベレスト、カラコラムで大きい成果をあげてゆく。

この主張は長年の経験を通して彼の固い信念に成長し、五三年エベレスト隊隊長変更の一因になつたのではないかと憶測出来るようになった。三九年のカラコラム遠征中に大戦勃発をラジオで聞きカシミールに戻る。やがて従軍を希望するがカシニガル総領事に任命され、フンザ経由、パミール高原を通りカシニガル到着、約二ヵ月の旅行であった。

シプトンは四〇年から四八年までに前後二回カシニガル総領事を赴任するが、この中央アジアでの生活を真から楽しんだように見え、次のような意味のことを書いている。領事館の窓から木々の向こうにアリゾナの荒野のような砂漠が見え、空気の澄んだ日には天山山脈が見える。一中略!。また、アンズ、イチジク、モモ、ブドウがあり、ことにメロンは九ヵ月も食べられる。と、そして帰国の際「タリム盆地を旅した西欧人の中ではここ数十年の内、私が最後の人間であり、タリムの昔ながらの有様をこう親しみ、深く知りつくした者としても最後であろう。」と、一三〇〇年前の玄奘三蔵も、七〇〇年前のマルコポーロも砂漠と果物について同じように書いていた。「昔ながらの有様」を親しく知りつくしたシプトンとして感慨にふけるのも無理ではない。この地方はシプトン在任時までは、時間が止まっていたが、革命後の中国の一部として現在は速いテンポで変化していると思われ。

五一年、昆明総領事から帰国して息つく暇もなくネパールからのエベレスト偵察に出発、年来の主張である小遠征隊編成で大きな収穫をあげる。このときヒラリーがフトしたことから参加を許される。五二年、エベレスト偵察帰国後、七月二十八日にヒマラヤ委員会議長から

次回遠征隊長に指名され、十一月まで懸命に準備に没頭、十一月十一日の委員会で準隊長はシプトンとハントの二名となり、次いでハントのみが隊長に指名される。この間の事情は明確には述べられていない。しかしこの辺りがこの本のクライマックスであろう。一九三三年以後の正式なエベレスト遠征のすべりに参加し、北からも、南からもエベレストを誰よりも知りつくしているシプトンにとって、隊長指名取り消しは断腸の思いであったであろう。おそらくシプトン自身としても自覚していたかどうか分らないが、全生涯をエベレストに懸けていたであろうから。

翌々五四年にはダイアナ夫人とも離婚している。この事件が影響していないとは云えない。第三の極地到達成功の裏にこのような事情があったとは意外である。四年後の五七年にはこの打撃から回復しカラコラム遠征をしている。次いでパタゴニア、フエゴ島など未知の状態にある山々や水原に情熱をかたむけ始める。そうした困難な地域で悪天候と強風中の行動は一九〇八年生まれの年令を考えるとまことに超人的な印象を受ける。

最後の、魅力の泉の章はシプトンの物の考え方、山への主張、道徳観などが述べられている。山への主張はトム・ボーディロンとの会話を通して探検的登山が自分として一番好ましいと通読してこのような面白い山の本はめったに有るものではないと思つた。この理由の第一は適当な所にクライマックスがあつて興味を継いでゆくこと第二はわたたくし達が長い間興味を持ち続けている人や地域が目の前に出てくること、第三はエリック・シプトンの個性がほのかに出てくること、そして

次回遠征隊長に指名され、十一月まで懸命に準備に没頭、十一月十一日の委員会で準隊長はシプトンとハントの二名となり、次いでハントのみが隊長に指名される。この間の事情は明確には述べられていない。しかしこの辺りがこの本のクライマックスであろう。一九三三年以後の正式なエベレスト遠征のすべりに参加し、北からも、南からもエベレストを誰よりも知りつくしているシプトンにとって、隊長指名取り消しは断腸の思いであったであろう。おそらくシプトン自身としても自覚していたかどうか分らないが、全生涯をエベレストに懸けていたであろうから。

その個性に好感が持てることなどであらう。

また、訳文も非常に読み易い日本語になっている。近頃、山の本の訳書は数多いが、読み易い日本語になっているのはまことに少ない。この本はその数少ないうちの一つであろう。各章の終りにある詳細な注は親切で、本文の理解に役立つのみでなく内容を豊富なものとしている。巻末の年表もよく参考になる。

(今村正仁)

昭和四十七年二月 茗溪堂刊  
A5判四〇頁 定価一九〇〇円

芝村文治著

『秘境・奥美濃の山旅』

読後

ガイド・ブック『秘境・奥美濃の山旅』が上梓された。いよいよ奥美濃もそんな時代に入ったのかという感慨も先に立つ。ここはあまりにも知られていない山域であった。それだけに一部の登山者に愛され、好まれてきた。

奥美濃は、長良・揖斐両川の水源部の山つまり岐阜・福井の異境およびそれ以南の山々で、重畳とつらなる緑色の山脈の他は何もないのである。高きも三千メートルを越すピークもなければ、温泉・名瀑の類もない。したがって登山客や遊客もなく、登山のための諸施設もないし、山の商人もない。まことにアルプスの登山者や観光客には、素っ気ないのが奥美濃である。では、そこそアルプスの股賑に辟易しガイド・ブックや指導標のない、そして人に思ふこともない山を求めめる人には、尽き

せぬ魅力を蔵している。そこで『奥美濃の山々』は、また登山の対象としてではなく、山村の人々の仕事場として存在するのであり登山路も『目的の山へ』といっている

思われる道があっても、それは伐採・植林・炭焼・出作りなど仕事のための道であり『頂上に至っているものは著者のいうように、ごく稀である。地図上の点線路についても『樹林の山旅』の森本次男氏がくり返し述べているように「かつて道があった」ことを示すにすぎない。しかし道もなく指導標もない所では、更に必要なものがかなりあり、右か左かの決意の問題である。ここに別の楽しみがある。この本を片手に探り登りに出かける時、そこに先人の足跡を検証するが、本来の奥美濃の楽しさから、最も大切なものを失うことになりはしないか。つまり、この本は詳しく、親切すぎるような気がする。奥美濃は深く、広い。小縮尺の精細図を作ることは登山者個人の情熱と能力にまかせておいて、その縮尺が大縮尺の奥美濃を描いて欲しかったのである。だが今、奥美濃は物凄く速く変化している。林道が開墾されたり、見事なツナ林もすべて伐採されて無残な山肌をあらわにする。それに過疎最奥の部落がひとつまたひとつ姿を消す。奥美濃は明日をどうにか迎えるのだらうか。しかし、このまっぴらな変化はそう長くは続かないだろう。いずれは原始と静寂の日々を迎えることがない。そして山には再び樹々が芽生え、無人の谷あるいは山の動物たちがかわって棲みつくことにならうか。今日は余りに無残すぎぬ。

それに『樹林の山旅』以来三十年にして第二の著書が上梓されたというのに、著者ならびに出版社の努力を多とせず、詭激に走り過ぎていると叶正を受けざるであらうが、どうやら海容あれ、唯々、彼地を愛する者があえて一つの考え方を申し述べたにすぎないのである。(高木泰夫)

昭和四十七年六月京都・ナカニシヤ出版刊 A5版二三三頁 七八〇円

▲岩永信雄氏寄贈図書▲

- (邦書)
1. Abraham, George D. British mountain climber. London, Mills & Boon, 1909.
2. Abraham, George D. The Complete mountaineer. 3d. rev. London, Methuen, 1923.
3. Abraham, George D. First Steps to Climbing. London, Mills, 1923.
4. Abraham, George D. Mountain adventures at home and abroad. London, Methuen, 1910.
5. Benson, C.E. British mountaineering. 2nd ed. rev. and enl. London, George Routledge, 1914.
6. Bridge books for the English channel with ten charts, giving courses and distances, soundings, lights fog signals, and general information. Revised 1920. Glasgow, James Brown, 1920.
7. Caulfeild, Vivian. How to ski and how not to. Photographs by K. Delap. London, Nisbet.
8. Caulfeild, Vivian. How to ski and how not to. photographs by K. Delap. London, Nisbet, 1921.
9. Fendrich, A.: Der Skilaufer: Ein Lehr- und Wanderbuch. 7. Aufl. Stuttgart, Franckh'sche, 19—.
10. Die Gefahren der Alpen: Erfahrungen und Gatschlage von Emil Zsigmondy und Wilhelm Pauke. München, Rudolf Rothen, 1922.
11. Japanese Antarctic Research Expedition. Report of the Japanese traverse Syowa-South Pole 1968-1969. Edited by Masayoshi Murayama. Tokyo, Polar Research Center, 1971.
12. Le Blond, Aubrey. True tales of mountain adventure: for non-climbers Young and old. London, Thomas Nelson, pref. 1922.
13. Lunn, Arnold. Alpine skiing at all heights and seasons. London, Methuen, 1921.
14. Lunn, Arnold. Cross-country skiing. London, Methuen, 1920.
15. Raeburn, Harold. Mountaineering art. London, T. Fisher, 1920.
16. Skisport: Ein Handbuehlein für Skilaufer und Sloche/Die Es Werden Wollen. 66. erw. und verb. Ausg. Bearb. von Gustav Walz-klosters, Zürich, Herausgeber Burgi, 19—.
17. Whympet, Edward. Scrambles amongst the Alps in the Years 1860-69. 2nd ed. London, John Murray, 1871.
18. Whympet, Edward. Travels amongst the great Andes of the equator. London, Thomas Nelson, 1910?
19. Wilson, Claude. Mountaineering. With illustrations by Ellis Carr. London, George Bell, 1883.
20. Der Wintersport: Eine Anleitung zur Ausübung zur Ausübung der wichtigsten Arten des Wintersports. Hrsg. von der Redaktion des Guten Kamerden. Bearb. von Carl J. Luther. Stuttgart, Union Deutsche, 19—.
21. Young, Geoffrey Winthrop. on high hills: memoirs of the Alps. London, Methuen, 1927.
22. Bechhold, Fritz. Nanga Parbat at adventure: a Himalayan expedition. Translated from the German by H.E.G. Tyndale. London, John Murray, 1935.
23. Bruce, C.G. The assault on Mount Everest 1922. London, Edward Arnold, 1923.
24. Conway, William Martin. Climbing and exploration in the Karakoram-Himalayas. London, T. Fisher Unwin, 1894.
25. Finch, George Ingle. The making of a mountaineer. London, Arrowsmith, 1924.
26. Hedin, Sven. Mount Everest. Leipzig, Brockhaus, 1923.
27. Hillary, Edmund. High adventure. With maps by A. Sparrk and sketches by George Durrkovic. London, Hodder & Stoughton, 1955.
28. Howard-Bury, C.K. Mount Everest: the reconnaissance 1921. London, Edward Arnold, 1922.
29. Howard-Bury, C.K. Mount Everest: the reconnaissance 1921. Large paper edition no. 98. London, Edward Arnold, 1922.
30. Hunt, John. The ascent of Everest. London, Hodder &

<p>31. Karakoram and western Himalaya 1909: an account of the expedition of H.R.H. Prince Luigi Amedeo of Savoy, by Filippo de Filippi. London, Constable, 1912.</p> <p>32. Norton, E.F. The fight for Everest: 1924. London, Edward Arnold, 1925.</p> <p>33. Pyle, David. George Leigh Mallory: a memoir by David Pyle. London, Oxford Univ. Press, 1927.</p> <p>34. Rutledge, Hugh. Everest: the unfinished adventure. London, Hodder &amp; Stoughton, 1937.</p> <p>35. Rutledge, Hugh. Everest 1933. London, Hodder &amp; Stoughton, 1934.</p> <p>36. Shipton, Eric. The Mount Everest: reconnaissance expedition 1951. London, Hodder &amp; Stoughton, 1952. (三十一)</p>	<p>研究・II』昭和47</p> <p>(2) 日本トビヤ山岳協会編『トビヤ山研究・III』昭和47</p> <p>(3) 向後代美氏寄贈</p> <p>(4) 向後代美氏著『ヒマラヤの世界的探検』昭和47</p> <p>(5) 定期刊行物受入報告</p> <p>(6) 尾瀬・谷報類</p> <p>(7) 日本ユニバーシティ会議『H・K・ユニバーシティ』No. 7 (47-8)</p> <p>(8) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 63 (47-8)</p> <p>(9) 京都山岳会『京都山岳』No. 568</p> <p>(10) 尾瀬の自然を学ぶ会『尾瀬リナー』No. 7 (47-8)</p> <p>(11) 東京野歩協会『山嶺』No. 508 (47-8)</p> <p>(12) 日本山岳協会『登山月報』No. 41 (47-8)</p> <p>(13) 名古屋山岳会『名古屋山岳会々報』No. 92, 93</p> <p>(14) 日本登山協会『山と雪』No. 172 (47-8)</p> <p>(15) 会津山岳協会『会務報告書』No. 12 (47-8)</p>	<p>新刊図書受入報告</p> <p>毎日新聞社寄贈</p> <p>(1) 森村浅香・桂著『おはあやふとトビヤヤ登る』昭和47</p> <p>光文社寄贈</p> <p>(1) 西丸震哉著『野外ハンドブック』昭和47</p> <p>山と溪谷社寄贈</p> <p>(1) 横山厚夫文・松村充イラスト『イラスト登山入門』昭和47</p> <p>南会津山の会寄贈</p> <p>(1) 南会津山の会編『さうりばた』昭和47</p> <p>日本トビヤ山岳協会寄贈</p> <p>日本トビヤ山岳協会編『トビヤ</p>	<p>研究・II』昭和47</p> <p>(2) 日本トビヤ山岳協会編『トビヤ山研究・III』昭和47</p> <p>(3) 向後代美氏寄贈</p> <p>(4) 向後代美氏著『ヒマラヤの世界的探検』昭和47</p> <p>(5) 定期刊行物受入報告</p> <p>(6) 尾瀬・谷報類</p> <p>(7) 日本ユニバーシティ会議『H・K・ユニバーシティ』No. 7 (47-8)</p> <p>(8) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 63 (47-8)</p> <p>(9) 京都山岳会『京都山岳』No. 568</p> <p>(10) 尾瀬の自然を学ぶ会『尾瀬リナー』No. 7 (47-8)</p> <p>(11) 東京野歩協会『山嶺』No. 508 (47-8)</p> <p>(12) 日本山岳協会『登山月報』No. 41 (47-8)</p> <p>(13) 名古屋山岳会『名古屋山岳会々報』No. 92, 93</p> <p>(14) 日本登山協会『山と雪』No. 172 (47-8)</p> <p>(15) 会津山岳協会『会務報告書』No. 12 (47-8)</p>	<p>研究・II』昭和47</p> <p>(2) 日本トビヤ山岳協会編『トビヤ山研究・III』昭和47</p> <p>(3) 向後代美氏寄贈</p> <p>(4) 向後代美氏著『ヒマラヤの世界的探検』昭和47</p> <p>(5) 定期刊行物受入報告</p> <p>(6) 尾瀬・谷報類</p> <p>(7) 日本ユニバーシティ会議『H・K・ユニバーシティ』No. 7 (47-8)</p> <p>(8) 兵庫山岳連盟『兵庫山岳』No. 63 (47-8)</p> <p>(9) 京都山岳会『京都山岳』No. 568</p> <p>(10) 尾瀬の自然を学ぶ会『尾瀬リナー』No. 7 (47-8)</p> <p>(11) 東京野歩協会『山嶺』No. 508 (47-8)</p> <p>(12) 日本山岳協会『登山月報』No. 41 (47-8)</p> <p>(13) 名古屋山岳会『名古屋山岳会々報』No. 92, 93</p> <p>(14) 日本登山協会『山と雪』No. 172 (47-8)</p> <p>(15) 会津山岳協会『会務報告書』No. 12 (47-8)</p>
<p>(1) 東京電機大学ヒマラヤ実行委員会『ヒマラヤ遠征計画書』72</p> <p>(2) 北大山岳部『北大山岳部々報』No. 11</p> <p>(3) 日本山岳会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書』68</p> <p>〔新著海外雑誌〕</p> <p>1. "Alpinismus" 72-7.</p> <p>2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 7, June '72.</p>	<p>(1) 東京電機大学ヒマラヤ実行委員会『ヒマラヤ遠征計画書』72</p> <p>(2) 北大山岳部『北大山岳部々報』No. 11</p> <p>(3) 日本山岳会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書』68</p> <p>〔新著海外雑誌〕</p> <p>1. "Alpinismus" 72-7.</p> <p>2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 7, June '72.</p>	<p>(1) 東京電機大学ヒマラヤ実行委員会『ヒマラヤ遠征計画書』72</p> <p>(2) 北大山岳部『北大山岳部々報』No. 11</p> <p>(3) 日本山岳会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書』68</p> <p>〔新著海外雑誌〕</p> <p>1. "Alpinismus" 72-7.</p> <p>2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 7, June '72.</p>	<p>(1) 東京電機大学ヒマラヤ実行委員会『ヒマラヤ遠征計画書』72</p> <p>(2) 北大山岳部『北大山岳部々報』No. 11</p> <p>(3) 日本山岳会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書』68</p> <p>〔新著海外雑誌〕</p> <p>1. "Alpinismus" 72-7.</p> <p>2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 7, June '72.</p>	<p>(1) 東京電機大学ヒマラヤ実行委員会『ヒマラヤ遠征計画書』72</p> <p>(2) 北大山岳部『北大山岳部々報』No. 11</p> <p>(3) 日本山岳会『日印合同婦人ヒマラヤ登山隊報告書』68</p> <p>〔新著海外雑誌〕</p> <p>1. "Alpinismus" 72-7.</p> <p>2. "Appalachia bulletin" Vol. 38, No. 7, June '72.</p>
<p>3. "Ascent" Vol. 1, No. 6, June '72.</p> <p>4. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Juni '72.</p> <p>5. "Deutschen Alpenvereins" Vol. 96, '71.</p> <p>6. "La montagne at alpinisme" No. 86/87, 1/2 '72.</p> <p>7. "Mountain" No. 21, May '72.</p> <p>8. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 27, Heft 516, Mai '72.</p> <p>9. "Rivista mensile" Anno. 92, N. 5, Maggio '72.</p> <p>10. "U.I.A.A." No. 49, Mai '72.</p> <p>11. "Verkehrsbuch" Sommer '72.</p>	<p>3. "Ascent" Vol. 1, No. 6, June '72.</p> <p>4. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Juni '72.</p> <p>5. "Deutschen Alpenvereins" Vol. 96, '71.</p> <p>6. "La montagne at alpinisme" No. 86/87, 1/2 '72.</p> <p>7. "Mountain" No. 21, May '72.</p> <p>8. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 27, Heft 516, Mai '72.</p> <p>9. "Rivista mensile" Anno. 92, N. 5, Maggio '72.</p> <p>10. "U.I.A.A." No. 49, Mai '72.</p> <p>11. "Verkehrsbuch" Sommer '72.</p>	<p>3. "Ascent" Vol. 1, No. 6, June '72.</p> <p>4. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Juni '72.</p> <p>5. "Deutschen Alpenvereins" Vol. 96, '71.</p> <p>6. "La montagne at alpinisme" No. 86/87, 1/2 '72.</p> <p>7. "Mountain" No. 21, May '72.</p> <p>8. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 27, Heft 516, Mai '72.</p> <p>9. "Rivista mensile" Anno. 92, N. 5, Maggio '72.</p> <p>10. "U.I.A.A." No. 49, Mai '72.</p> <p>11. "Verkehrsbuch" Sommer '72.</p>	<p>3. "Ascent" Vol. 1, No. 6, June '72.</p> <p>4. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Juni '72.</p> <p>5. "Deutschen Alpenvereins" Vol. 96, '71.</p> <p>6. "La montagne at alpinisme" No. 86/87, 1/2 '72.</p> <p>7. "Mountain" No. 21, May '72.</p> <p>8. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 27, Heft 516, Mai '72.</p> <p>9. "Rivista mensile" Anno. 92, N. 5, Maggio '72.</p> <p>10. "U.I.A.A." No. 49, Mai '72.</p> <p>11. "Verkehrsbuch" Sommer '72.</p>	<p>3. "Ascent" Vol. 1, No. 6, June '72.</p> <p>4. "Der Bergsteiger" Jah. 39, Juni '72.</p> <p>5. "Deutschen Alpenvereins" Vol. 96, '71.</p> <p>6. "La montagne at alpinisme" No. 86/87, 1/2 '72.</p> <p>7. "Mountain" No. 21, May '72.</p> <p>8. "Österreichischer Alpenverein" Jah. 27, Heft 516, Mai '72.</p> <p>9. "Rivista mensile" Anno. 92, N. 5, Maggio '72.</p> <p>10. "U.I.A.A." No. 49, Mai '72.</p> <p>11. "Verkehrsbuch" Sommer '72.</p>
<p>〔邦書受入報告〕</p> <p>1. 連邦ソビエト連邦寄贈</p> <p>U.S.S.R. "Human Adaptability" 1972.</p> <p>2. B.H. Cepunozokozo "TPOBI EMBH KOOMHЧECKOH BHOJI OIIMH" 1968.</p> <p>Swiss Foundation for Alpine Research 寄贈</p> <p>1. "Schweizerische Stiftung Für Alpine Forschungen" 1972.</p> <p>Gaston's Alpine Books 寄贈</p> <p>1. D. Bennet "Staunings Alps" 1972.</p> <p>〔地図受入報告〕</p> <p>孫慶錫氏寄贈</p> <p>(1) 『智異山』登山・ハイキングシリーズ①』昭和47</p>	<p>〔邦書受入報告〕</p> <p>1. 連邦ソビエト連邦寄贈</p> <p>U.S.S.R. "Human Adaptability" 1972.</p> <p>2. B.H. Cepunozokozo "TPOBI EMBH KOOMHЧECKOH BHOJI OIIMH" 1968.</p> <p>Swiss Foundation for Alpine Research 寄贈</p> <p>1. "Schweizerische Stiftung Für Alpine Forschungen" 1972.</p> <p>Gaston's Alpine Books 寄贈</p> <p>1. D. Bennet "Staunings Alps" 1972.</p> <p>〔地図受入報告〕</p> <p>孫慶錫氏寄贈</p> <p>(1) 『智異山』登山・ハイキングシリーズ①』昭和47</p>	<p>〔邦書受入報告〕</p> <p>1. 連邦ソビエト連邦寄贈</p> <p>U.S.S.R. "Human Adaptability" 1972.</p> <p>2. B.H. Cepunozokozo "TPOBI EMBH KOOMHЧECKOH BHOJI OIIMH" 1968.</p> <p>Swiss Foundation for Alpine Research 寄贈</p> <p>1. "Schweizerische Stiftung Für Alpine Forschungen" 1972.</p> <p>Gaston's Alpine Books 寄贈</p> <p>1. D. Bennet "Staunings Alps" 1972.</p> <p>〔地図受入報告〕</p> <p>孫慶錫氏寄贈</p> <p>(1) 『智異山』登山・ハイキングシリーズ①』昭和47</p>	<p>〔邦書受入報告〕</p> <p>1. 連邦ソビエト連邦寄贈</p> <p>U.S.S.R. "Human Adaptability" 1972.</p> <p>2. B.H. Cepunozokozo "TPOBI EMBH KOOMHЧECKOH BHOJI OIIMH" 1968.</p> <p>Swiss Foundation for Alpine Research 寄贈</p> <p>1. "Schweizerische Stiftung Für Alpine Forschungen" 1972.</p> <p>Gaston's Alpine Books 寄贈</p> <p>1. D. Bennet "Staunings Alps" 1972.</p> <p>〔地図受入報告〕</p> <p>孫慶錫氏寄贈</p> <p>(1) 『智異山』登山・ハイキングシリーズ①』昭和47</p>	<p>〔邦書受入報告〕</p> <p>1. 連邦ソビエト連邦寄贈</p> <p>U.S.S.R. "Human Adaptability" 1972.</p> <p>2. B.H. Cepunozokozo "TPOBI EMBH KOOMHЧECKOH BHOJI OIIMH" 1968.</p> <p>Swiss Foundation for Alpine Research 寄贈</p> <p>1. "Schweizerische Stiftung Für Alpine Forschungen" 1972.</p> <p>Gaston's Alpine Books 寄贈</p> <p>1. D. Bennet "Staunings Alps" 1972.</p> <p>〔地図受入報告〕</p> <p>孫慶錫氏寄贈</p> <p>(1) 『智異山』登山・ハイキングシリーズ①』昭和47</p>
<p>九月理事評議員会 (八日午後六時半本会ルーム)</p> <p>出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 板倉 近藤 丹部 俣山 大森 松丸 神原 広谷 神崎 須田 坂下 宮下各理事 加藤 望月 織内 小原 金坂各評議員 今井監事</p> <p>△報告事項</p> <p>・山岳研究所の工事が一般の豪雨で遅れ勝ちであり、九月十七日に建前を行うが、年内の完成が危ぶまれている (伊倉・林)</p> <p>・十一月十一日(土)OAG会館で三時より臨時総会、引き続き五時より武田名誉会員の追悼会を開催する。</p> <p>総会の主な議題は定款の改正と会費の値上げの件であるが、成瀬副会長を長として評議員を中心に定款改正小委員会を作り、十月の理事会に案を提出検討して貰いたい。(中屋)</p> <p>・本会ルーム移転の件は、検討資料不足のため臨時総会には議題として出さない。(加藤)</p> <p>・八月二十九日よりスイスのモントルーで開かれたUIAAの総会に出席した神原理事より、三十数か国百五十余名の各国山岳会会長、副会長クラスの出席があり、年次報告、各種委員会長の退き、新会長にジャン・ジョージヌ(スイス)、副会長にヒース(オーストリア)両氏が選ばれ、七三年の総会はソ連グルジア共和国のトビリシで開催される。個人的なつながりを重視する楽しい総会であった。(神原)</p> <p>・八月十五日名誉会員牧野平五郎氏が逝去され、中田支部長が会の代表として葬儀に参列した。</p> <p>・武田家のご遺族より葬儀の返礼があった。</p> <p>・加納一朗会員より図書購入費として金一万円寄贈された。本年未消化の場合次期に繰越したい。(伊倉)了承</p> <p>・日山協関係として、ネパールの三入座以外に三座が正式に解禁され、ヤ</p>	<p>九月理事評議員会 (八日午後六時半本会ルーム)</p> <p>出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 板倉 近藤 丹部 俣山 大森 松丸 神原 広谷 神崎 須田 坂下 宮下各理事 加藤 望月 織内 小原 金坂各評議員 今井監事</p> <p>△報告事項</p> <p>・山岳研究所の工事が一般の豪雨で遅れ勝ちであり、九月十七日に建前を行うが、年内の完成が危ぶまれている (伊倉・林)</p> <p>・十一月十一日(土)OAG会館で三時より臨時総会、引き続き五時より武田名誉会員の追悼会を開催する。</p> <p>総会の主な議題は定款の改正と会費の値上げの件であるが、成瀬副会長を長として評議員を中心に定款改正小委員会を作り、十月の理事会に案を提出検討して貰いたい。(中屋)</p> <p>・本会ルーム移転の件は、検討資料不足のため臨時総会には議題として出さない。(加藤)</p> <p>・八月二十九日よりスイスのモントルーで開かれたUIAAの総会に出席した神原理事より、三十数か国百五十余名の各国山岳会会長、副会長クラスの出席があり、年次報告、各種委員会長の退き、新会長にジャン・ジョージヌ(スイス)、副会長にヒース(オーストリア)両氏が選ばれ、七三年の総会はソ連グルジア共和国のトビリシで開催される。個人的なつながりを重視する楽しい総会であった。(神原)</p> <p>・八月十五日名誉会員牧野平五郎氏が逝去され、中田支部長が会の代表として葬儀に参列した。</p> <p>・武田家のご遺族より葬儀の返礼があった。</p> <p>・加納一朗会員より図書購入費として金一万円寄贈された。本年未消化の場合次期に繰越したい。(伊倉)了承</p> <p>・日山協関係として、ネパールの三入座以外に三座が正式に解禁され、ヤ</p>	<p>九月理事評議員会 (八日午後六時半本会ルーム)</p> <p>出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 板倉 近藤 丹部 俣山 大森 松丸 神原 広谷 神崎 須田 坂下 宮下各理事 加藤 望月 織内 小原 金坂各評議員 今井監事</p> <p>△報告事項</p> <p>・山岳研究所の工事が一般の豪雨で遅れ勝ちであり、九月十七日に建前を行うが、年内の完成が危ぶまれている (伊倉・林)</p> <p>・十一月十一日(土)OAG会館で三時より臨時総会、引き続き五時より武田名誉会員の追悼会を開催する。</p> <p>総会の主な議題は定款の改正と会費の値上げの件であるが、成瀬副会長を長として評議員を中心に定款改正小委員会を作り、十月の理事会に案を提出検討して貰いたい。(中屋)</p> <p>・本会ルーム移転の件は、検討資料不足のため臨時総会には議題として出さない。(加藤)</p> <p>・八月二十九日よりスイスのモントルーで開かれたUIAAの総会に出席した神原理事より、三十数か国百五十余名の各国山岳会会長、副会長クラスの出席があり、年次報告、各種委員会長の退き、新会長にジャン・ジョージヌ(スイス)、副会長にヒース(オーストリア)両氏が選ばれ、七三年の総会はソ連グルジア共和国のトビリシで開催される。個人的なつながりを重視する楽しい総会であった。(神原)</p> <p>・八月十五日名誉会員牧野平五郎氏が逝去され、中田支部長が会の代表として葬儀に参列した。</p> <p>・武田家のご遺族より葬儀の返礼があった。</p> <p>・加納一朗会員より図書購入費として金一万円寄贈された。本年未消化の場合次期に繰越したい。(伊倉)了承</p> <p>・日山協関係として、ネパールの三入座以外に三座が正式に解禁され、ヤ</p>	<p>九月理事評議員会 (八日午後六時半本会ルーム)</p> <p>出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 板倉 近藤 丹部 俣山 大森 松丸 神原 広谷 神崎 須田 坂下 宮下各理事 加藤 望月 織内 小原 金坂各評議員 今井監事</p> <p>△報告事項</p> <p>・山岳研究所の工事が一般の豪雨で遅れ勝ちであり、九月十七日に建前を行うが、年内の完成が危ぶまれている (伊倉・林)</p> <p>・十一月十一日(土)OAG会館で三時より臨時総会、引き続き五時より武田名誉会員の追悼会を開催する。</p> <p>総会の主な議題は定款の改正と会費の値上げの件であるが、成瀬副会長を長として評議員を中心に定款改正小委員会を作り、十月の理事会に案を提出検討して貰いたい。(中屋)</p> <p>・本会ルーム移転の件は、検討資料不足のため臨時総会には議題として出さない。(加藤)</p> <p>・八月二十九日よりスイスのモントルーで開かれたUIAAの総会に出席した神原理事より、三十数か国百五十余名の各国山岳会会長、副会長クラスの出席があり、年次報告、各種委員会長の退き、新会長にジャン・ジョージヌ(スイス)、副会長にヒース(オーストリア)両氏が選ばれ、七三年の総会はソ連グルジア共和国のトビリシで開催される。個人的なつながりを重視する楽しい総会であった。(神原)</p> <p>・八月十五日名誉会員牧野平五郎氏が逝去され、中田支部長が会の代表として葬儀に参列した。</p> <p>・武田家のご遺族より葬儀の返礼があった。</p> <p>・加納一朗会員より図書購入費として金一万円寄贈された。本年未消化の場合次期に繰越したい。(伊倉)了承</p> <p>・日山協関係として、ネパールの三入座以外に三座が正式に解禁され、ヤ</p>	<p>九月理事評議員会 (八日午後六時半本会ルーム)</p> <p>出席者 成瀬 吉沢副会長 中屋 林 伊倉 板倉 近藤 丹部 俣山 大森 松丸 神原 広谷 神崎 須田 坂下 宮下各理事 加藤 望月 織内 小原 金坂各評議員 今井監事</p> <p>△報告事項</p> <p>・山岳研究所の工事が一般の豪雨で遅れ勝ちであり、九月十七日に建前を行うが、年内の完成が危ぶまれている (伊倉・林)</p> <p>・十一月十一日(土)OAG会館で三時より臨時総会、引き続き五時より武田名誉会員の追悼会を開催する。</p> <p>総会の主な議題は定款の改正と会費の値上げの件であるが、成瀬副会長を長として評議員を中心に定款改正小委員会を作り、十月の理事会に案を提出検討して貰いたい。(中屋)</p> <p>・本会ルーム移転の件は、検討資料不足のため臨時総会には議題として出さない。(加藤)</p> <p>・八月二十九日よりスイスのモントルーで開かれたUIAAの総会に出席した神原理事より、三十数か国百五十余名の各国山岳会会長、副会長クラスの出席があり、年次報告、各種委員会長の退き、新会長にジャン・ジョージヌ(スイス)、副会長にヒース(オーストリア)両氏が選ばれ、七三年の総会はソ連グルジア共和国のトビリシで開催される。個人的なつながりを重視する楽しい総会であった。(神原)</p> <p>・八月十五日名誉会員牧野平五郎氏が逝去され、中田支部長が会の代表として葬儀に参列した。</p> <p>・武田家のご遺族より葬儀の返礼があった。</p> <p>・加納一朗会員より図書購入費として金一万円寄贈された。本年未消化の場合次期に繰越したい。(伊倉)了承</p> <p>・日山協関係として、ネパールの三入座以外に三座が正式に解禁され、ヤ</p>

開いた。なお本年度の事業の内、山岳会の紹介の英文パンフレットは近日中にまとまるが、日本アルプス案内(英文)が手付かずなので後任に託したい。(神原)

▽議事

・中島道郎Dr.の国際生気象学会派遣の件。  
 医療委員会では、昨年末エペレスト登山報告書で高処医学のデータ、研究をまとめたが、これの国外発表を考慮し、この国際体力スポーツ学会とアムステルダムでの国際生気象学会の両会に報告手続をしておいたところ、七月初旬国際生気象学会より中島Dr.あて二十分の特別講演と十分の討議時間を与えられる招待状が届いた。八月の理事会が休会のため手続の遅れをとったが、各常務理事に連絡の上、四十七年度の医療委予算五万円の支出を認めて貰い、医療委内のカンパ五万、個人負担二十万の他に、一般会計より十万円の支出をお願いしたい。(大森)

本件了承

・ゼロックスレンタルの件  
 管理にやや問題があるが、三カ月のテスト期間後に、利用価値の有無を判断したい。  
 レンタル料は月間一万六千円他に用紙代実費 了承  
 ・四十七年度除籍者の件  
 別紙(略)の五年間会費未納会員八二名の除籍に関し、総会に提案したい。了承

次回常務理事会は九月二十九日(金)理事評議員会は十月六日(金)とする。

ルーム日誌(47年8月)

- 7日(月) 集会委員会
- 10日(木) 海外連絡委員会
- 11日(金) 南会津山の会
- 14日(月) 桜門山岳会
- 23日(水) 自然保護委員会
- 24日(木) 青年懇談会
- 会報委員会
- 8月中来客者 二三五名
- 会員異動(47年8月)
- 終身会員
- 一八五三 網藏 志朗
- 物故会員
- 二〇六 牧野平五郎 昭和四七・八・一五逝去

お知らせ

第二八九回現地小集會

- 日時 十月二十二日(日)
- 場所 大岳山集中登山
- コース 奥多摩・大岳山
- A・滝本―ケープブルー―御岳―大岳山
- B・滝本―徒歩―御岳―大岳山
- C・奥多摩駅―海沢―大滝山
- D・十里木―馬頭刈尾根―大岳山
- 下山・大岳山―鋸尾根―奥多摩駅
- 第十五回 もみじ会 二報
- 会場変更通知

集合 十一月四日午後一時 静岡市役所玄関前。募集人員 フトンの都合で五十名限。費用 二七〇〇円―泊三食

下山迄。安倍奥の旧家を貸り、いろりを囲んで諸先輩の話をお聞きし、翌日A班智香山越え大井川下り。B班宇治川先陣争いの名馬摺墨の産湯の滝、福養滝迄往復。参考地図―千頭・家山静岡支部宛直接お申込み下さい。  
 『山岳』覆刻版第一年第三号 が出来上りました。三百部限定、頒価一八〇〇円(送料二〇〇円)です。お早目に事務局までお申し込み下さい。第一年第二号は残部僅少。  
 ひきつづき第四年までの覆刻を計画、準備をすすめております(年間三冊刊行の予定)がご希望の方は予約して下さい。ご希望の方は予約して下さい。ご希望の方は予約して下さい。

▼上高地山岳研究所建設ニュース▲  
 九月二十五日現在、応募件数二七六件、応募金額二、〇〇九、一〇三円  
 目標額対比四〇・二%です。  
 本会の事業遂行に深くご理解いただき、ご寄付賜われますようお願いいたします。ご入金後は後ほど結構です。至急ご予約下さい。  
 訂正 会報「山」第三七号九頁 Keep Japan Clean (タイトル)は Keep Japan Clean の誤りにつき訂正、また同号第十五回もみじ会のお知らせ文中、名馬とあるのは名馬の誤りにつき訂正お詫びいたします。

あとがき 牧野平五郎名誉会員、田部重治名誉会員が相ついで逝去された。生前の本会に尽くされた功績を想起し、謹んで哀悼の意を表します。(S)  
 昭和四十七年十月十日発行  
 東京都千代田区神田錦町 三一三 向井ビル

発行所 社団法人 日本山岳会  
 編集代表 坂下心一  
 (293) 七四四一  
 振替口座東京四八二九番  
 東京都港区赤坂二丁目三番六号  
 印刷所 株式会社 技報堂

